

あらすじ

響くお坊さんのお経。祭壇に飾られた亀の遺影。仲山家ではペットの亀の葬式が執り行われていた。そんな中、仲山悠一（28）が訪れる。

父親の葬式には来なかったくせに亀の葬式には顔を出す悠一に苛立ちを抑えきれない妹と久しぶりに東京から顔を出した息子に喜ぶ母。悠一は、お父さんに線香をあげていきなさいと母から言われるが、嫌気がさし帰ろうと家を出る。

そんな悠一の前に突如一匹の亀が現れる。亀は悠一をどこかへ案内するかのようのそのそと歩き始める。悠一は亀についていきながら嫌いな父親の事を思い返していく。

幼い頃、お祭りの亀すくいで絶対すくってやると男の約束をしてくれた父の事。だがすくえず見苦しい言い訳をした父の事。

悠一は気づくと亀すくい屋の前にいた。店主に促されるまま亀をすくい始める悠一に店主は11年間亀をすくいに来る客がいたと話す。悠一はその客が父親だと確信し、線香を上げに家に戻るのだった。

登場人物表

仲山悠一 (28) (8) 美容師
仲山武男 (36) 悠一の父
仲山恵子 (53) 悠一の母
仲山咲 (26) 悠一の妹
お坊さん
店主

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

○神社・外観(夜)

こぢんまりとしながらも活気のあるお祭りが行われている。
タコ焼き、金魚すくい、かき氷といった出店が並ぶ。

○同・亀すくい屋・前(夜)

沢山の小さい亀が泳いでいる水槽。

わたあめ片手にじーっと水槽を眺めている仲山悠一(8)。

仲山の声「悠一！」

悠一、振り返ると少し離れたところで仲山武男(36)が大
きく手を振っている。

仲山「金魚すくいあったぞ！」

悠一、亀の水槽に視線を戻す。

すいすいと泳いでいる亀たち。

仲山、悠一の隣に来て、

仲山「亀か」

悠一「(頷く)」

仲山「金魚は」

悠一「亀がいい」

仲山「亀がいいのか」

悠一「亀がいい」

仲山「……よしすくってやる」

悠一「(笑顔になり)ほんと？ すくえる？」

仲山「ああ。すくうぞ。絶対すくう。約束する」

悠一「約束？」

仲山「ああ。約束。男の約束だ」

仲山、財布から小銭を出し、店主に、

仲山「すいませーん」

期待に満ちた悠一の表情。

○仲山家・外観

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

木造の一軒家。

お坊さんのお経が響いている。

T『20 年後』

○同・居間

お坊さんがお経を読んでいる。

喪服姿の仲山恵子(53)と仲山咲(26)が沈痛な面持ちで座っている。

扉が勢いよく開くと、悠一(28)が半笑いで入ってくる。

悠一を睨みつける咲。

悠一、おどけた表情。

恵子、悠一に座りなさいと目線で合図。

悠一、のそのそと恵子の隣に座ると、前を見てプツと嘔き出す。

舌打ちをする咲。

ため息をつく恵子。

小さい祭壇には、亀の顔が大きく写った遺影が飾られている。必死に笑いを堪える悠一。

○同

テーブルに並んでいる手作りの亀グッズ。

亀形の飴。亀形のクッキー。亀のフェルト人形等。

恵子、咲、目を輝かせてグッズ達を眺めている。

部屋の隅でニヤニヤと三人を眺めている悠一。

お坊さん、自信ありげに、

お坊さん「いかががでしょうか」

咲「超可愛いです。ありがとうございます」

お坊さん「それは良かった」

恵子「結構大変だったでしょう」

お坊さん「ご遺族の方々にはちゃんとお別れして欲しいですから」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

悠一の声「(半笑い)ご遺族って」

咲、怒りの表情で立ち上がる。

咲「ねえ」

恵子「咲」

咲「……(堪える)」

お坊さん「お兄さんもどうですか？(クッキーを差し出して) 思い出話でもしながら」

悠一「あ、大丈夫です。亀との思い出とかないんで」

咲、お坊さんからクッキーを受け取り、

咲「この人、人間の心が無いんで」

お坊さん、苦笑すると、

お坊さん「では私はそろそろ」

恵子「もう行かれるんですか？ お茶出そうと思ったのに」

お坊さん「次が控えていますので」

悠一「(半笑いで)次はなんの動物ですか？」

お坊さん「ハムスターです」

悠一「(馬鹿にして)ハムスター！」

拳を握りしめる咲。

お坊さん、立ち上がり会釈をすると出ていく。

恵子と咲もお坊さんを見送るため部屋を出ていく。

悠一「……」

悠一、居心地悪そうに部屋を歩き回り、亀の遺影を覗き込む。

悠一「臭そうな顔」

悠一、部屋の隅にある大きな仏壇が目に入る。

仲山の遺影。

悠一「……」

恵子「お線香あげてきなさい」

悠一、振り返ると恵子が立っている。

悠一「……」

咲、入ってきて、

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

咲「父親だと思ってないんでしょ」

恵子「咲」

咲「お父さんの葬式には来ないのに亀の葬式には来るんだ」

悠一「いや、だってなんか面白そうだし」

咲「……死ねよ」

恵子「こら不謹慎でしょ」

咲「気が済んだろ。早くトーキョー帰れよ」

悠一「おお、言われなくても帰らしてもらおうわ。トーキョーに」

恵子「ちよつと、晩御飯食べていかないの？」

悠一、険しい咲の顔を横目で見て、

悠一「(苦笑いして) ああ、帰る」

悠一、自分の鞆を掴んで出ていく。

恵子「ちよつと！ せめて線香だけでもあげてきなさいよ！」

恵子、追いかけてようとするが咲、恵子の腕を掴み、

咲「もういいでしょ。あんな奴」

恵子、咲の手を優しく離すと悠一を追いかけていく。

○同・前

玄関の扉が開くと恵子が飛び出てくる。

恵子「悠一！」

恵子、家の前の道に出て辺りを見回すが、悠一の姿はない。

恵子「……」

恵子、諦めて家に戻ろうと振り返ると家の脇で煙草を吸って

いる悠一と目が合う。

恵子「……そこにいたの」

悠一「名前を叫ぶなよ恥ずかしい」

恵子、無言で悠一の隣に立つ。

恵子「……線香」

悠一「しつこいな」

恵子「冷やかしに来ただけってわけじゃないんでしょ」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

悠一 「いや冷やかashi 100パーですわ」

恵子 「冷やかすためにあんたがわざわざ帰ってくるわけないじゃない
い」

悠一 「……」

恵子、無言の悠一を見て小さくため息をつく。

恵子 「一本頂戴」

悠一 「やめたんじゃねえのかよ」

悠一、煙草とライターを恵子に差し出す。

煙草に火をつけ、ライターを返す恵子。

無言で煙草を吸う二人。

悠一 「あの人はさ、俺の夢を馬鹿にしたの」

恵子 「……」

悠一 「美容師なんてなよなよした奴がなるもんだって」

恵子 「前時代的な人だから」

悠一 「別に俺男らしさでこの先売っていかねえし。てかなよなよし
てるかしてないかでいったら確実になよなよしてるあんたに言わ
れてもって感じだし。てか俺が一番許せないのは美容師っていう
職業を馬鹿にしてきた事で」

恵子 「あんたもさっきお坊さんの事馬鹿にしてたでしょ」

悠一、気まずそうに煙草を吸って、

悠一 「……その、なんだ。俺はお坊さんを馬鹿にしてたわけじゃな
くて動物の葬式という行い自体を」

恵子 「(笑って) ほんとあんたお父さんに似てるね」

悠一 「……は」

恵子 「都合が悪くなるとすぐ逃げる」

悠一 「……別に逃げてねえし」

恵子 「あんたはね、お父さんのそういうところが嫌いななのよ」

悠一 「……」

恵子 「……死んで良かったって思ってるのよ」

悠一 「(目を丸くして) え？」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

恵子 「……あ、いや亀。亀の話」

悠一 「ああ、なんだ亀ね……」

恵子 「お父さんが死んでから結構世話大変だったからね。水の取り換えて腰やりかけたし。臭いし。意外とデリケートだし」

悠一 「なんで亀なんか飼ったんだよ」

恵子 「え？」

悠一 「あ？」

恵子 「気付いてると思ってたけど」

悠一 「……」

恵子 「それとも気付いてない振りしてるだけ？」

悠一 「……」

恵子、煙草の火を地面で消して、

恵子 「あんたの分のご飯も作るからね」

悠一 「いや俺今から帰るんだって」

恵子、無視して家に入っていく。

悠一 「帰るからな！」

悠一、煙草の火を消すためしゃがむとそのまま固まる。

悠一の視線の先には亀が一匹。

亀の頭には三角の白い布。

悠一、亀を凝視する。

亀、道路の方へそのそと歩き始める。

悠一、呆気にとられたまま亀を見つめる。

○同・台所

料理の支度を始める恵子。

咲、やってきて、

咲 「消えた？」

恵子、咲に箸を渡す。

咲、受け取った箸は三膳。

咲 「……」

咲、一膳分を恵子に返す。
恵子、気づかない振りをして支度を続ける。

○道(夕)

のろのろと進む亀の後ろをついていく悠一。
亀と悠一を自転車が颯爽と追い越していく。
腰の曲がったお婆さんも亀と悠一を追い越していく。
悠一、ハツとして立ち止まる。
悠一の目線の先にはシャッターの閉まった熱帯魚店。
店の色褪せた看板には『亀、います』の文字。

○(回想)熱帯魚店・前(夕)

色褪せていない『亀、います』の看板。
営業している熱帯魚店。
俯いている悠一(8)。

仲山(36)、困惑した顔で、

仲山「どうした。入らないのか」

悠一「……」

仲山「亀、欲しいんだろ？ 買ってやるから」

悠一「……すくいたい」

仲山「見てただろ。難しいんだよあれ」

悠一「……やだ」

仲山「お前な、あんまりわがまま言ってるよ」

悠一「約束したもん」

仲山「え？」

悠一「お父さん約束したもん。絶対すくうって」

仲山「……」

悠一「男の約束って言ったもん」

悠一、泣きそうな顔で仲山を睨みつけている。
仲山、困ったように頭を掻いて、

仲山「その……まあなんだ。破られる約束だっただけでもないんじゃないか？」

悠一、早歩きで仲山から離れていく。

仲山「おい悠一！」

悠一「もういい！ 亀なんていらさない！」

ずんずんと離れていく悠一。

○（戻って）道（夕）

色褪せた看板。

立ち尽くす悠一。

悠一、ハツとして目線を足元に戻すと亀がいない。

キョロキョロと辺りを見回すと、亀は既に遠くを歩いている。

悠一「……」

悠一の後ろから楽しそうな女の子達の声。

振り向くと、浴衣を着た女の子達がはしやぎながら悠一を通

り過ぎ、亀の進む方へ走っていく。

太鼓の音が聴こえる。

熱帯魚店の壁には神社のお祭りを案内するチラシ。

悠一、亀の方へ向かっていく。

○神社・外観（夜）

こぢんまりした神社のお祭りが行われている。

ちらほらと並ぶ出店。

活気はあまりない。

○同・亀すくい屋（夜）

沢山の小さい亀が泳いでいる水槽。

ゆつくりと悠一がやってくる。

店主、威勢よく、

店主「いらっしやい！」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

悠一「……」

店主「一人かい」

悠一、隣を見る。

地面には三角の白い布をつけた亀。

店主「やる？」

悠一、財布を取り出し、小銭を店主に渡すと最中のポイを受け取る。

悠一、しゃがんで亀をすくい始めるがすぐに折れる最中。

店主「ああー残念！ やる？」

悠一、小銭を店主に渡し、最中を受け取る。

水槽に入った最中が一瞬で折れる。

店主「残念！ やる？」

悠一、店主に小銭を渡し、最中を受け取る。

店主「なんか兄ちゃん見てると思い出すなあ。あのおっさんの事」

悠一、え？と。

店主「毎年必ずすくいに来てたおっさんがいてなあ。これがまあすっごい下手なんだよ。一日中すくうんだけど毎年一匹たりともすくえないの」

悠一「……」

店主「一匹ぐらいならサービスするって言っても絶対断るんだよ。」

すくわなきや意味がない。男の約束だからって」

悠一「……」

店主「忘れもしねえ。あれはすくい始めて11年目だよ。すくえただよやっとかさ。ちっこかったけどなあ、俺は嬉しくて嬉しくて涙が出たね。おっさんも子供のように泣いてたよ」

折れる最中。

店主「あー残念。やるか？」

俯いて肩を震わしている悠一。

店主「おい……兄ちゃんどうした。大丈夫か？」

悠一、ただ頷く。

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

○仲山家・居間(夜)

恵子と咲、食事をしている。

全く手をつけられていない一人分の料理。

咲「どうすんのこれ」

恵子「……」

扉が開き、悠一が入ってくる。

悠一「玄関閉めとけよ。あぶねえな」

咲「……え」

恵子「……悠一」

咲「てかお前それなに！」

悠一「え？」

咲「それ！ 手に持ってるやつ！」

悠一の手には亀が一匹入った袋。

悠一「ああ、新しい家族？」

咲「はあ！？」

プツと噴き出す恵子。

咲「(恵子に)なに笑ってんの」

仲山の仏壇の方へ進む悠一。

啞然と悠一を眺める咲と微笑んでいる恵子。

悠一、仏壇の前に座ると線香を上げる。

悠一「なあ、俺、一日ですくえたんだけど」

袋に入っている亀がスイスイと泳いでいる。

〈終〉